平成 21 年度企画展

# 考古資料にみる
# 日本・沖縄

開催期間：９月 29 日（火）～ 11 月８日（日）

沖縄県立埋蔵文化財センター

# もくじ

ごあいさつ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
1　貝塚時代からグスク時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
【コラム1】「大和旅上て何買いぎや上てが」―久米島おもろの神女たち― ・5
2　陶磁器からみた日本 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
3　沖縄からみた日本 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
【コラム2】うつわに刻まれた「戦争」 ・・・・・・・・・・・・・・・ 10
【コラム3】スンカンマカイについて ・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
【コラム4】県内で確認された陶磁器の埋納 ・・・・・・・・ 11
4　特別寄稿 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
【特別寄稿 1】考古学とアイデンティティーについて ・・・・・・ 12
【特別寄稿 2】琉球王国と鋳銭生産の画期 ・・・・・・・・・・・ 15

# 凡　例

1．本書は、沖縄県立埋蔵文化財センターの企画展「考古資料にみる日本・沖縄」を補完するものとして編集しました。

2．図録・パネル等では、本州や九州などの総称として一般名称の「日本」を用いています。

3．「沖縄」も同様に沖縄諸島から宮古、八重山諸島（一部で奄美諸島もふくむ）までを指す一般名称としてもちいています。

4．コラム１では、巻二十一の引用は外間ほか（1982）の開読を、その他は外間・西郷（1972）を用いています。カッコの番号は二書によっています。

5．上原静氏、新里貴之氏の論文は別機関の冊子に掲載されていたものですが、本企画展の内容を補完するものであること、一般の方が入手しづらい冊子であることからご本人、掲載誌の機関に転載をお願いしました。ご許可くださいました両氏ならびに関係機関の皆さまに感謝申し上げます。

6．許可なく本書の複製および転載、複写を禁じます。

# ごあいさつ

沖縄諸島では、縄文時代から平安時代に並行する時代を「貝塚時代」とも称するように、日本とは異なる特徴的な文化をもっていたことがわかっています。しかし、貝塚時代後期前半（弥生時代並行期）には貝輪の材料としてイモガイやゴホウラといった貝が九州へ運ばれ、九州からは弥生土器などがもたらされるなど、交易を通じて日本と沖縄の関わりが明らかになっています。

グスク時代になると「旧首里城正殿鐘（万国津梁の鐘）」の銘文にあるように琉球王国は海外との交易を活発に行い、中国や東南アジアから陶磁器をはじめとするさまざまな交易品がもたらされました。この様子は当センターで収蔵しております首里城京の内跡出土の陶磁器（重要文化財）にもみることができます。

グスク時代、沖縄は海外との関わりが注目されますが、それ以降の沖縄と日本との関わりはどのようなものだったのでしょうか。

今回の企画展は、「貝塚時代からグスク時代」、「陶磁器からみた日本」、「沖縄からみた日本」の三部構成として、沖縄と日本の関わりをみていきます。展示は「陶磁器からみた日本」を中心にして、これまでの発掘調査で県内から出土した日本産の陶磁器の中から主要なものをとりあげています。また、それぞれの陶磁器の出土した状況などを分かりやすくするため、「古墓の陶磁器」、「首里城の陶磁器」、「集落の陶磁器」の三つのテーマに分け展示しております。

展示された陶磁器は、遺跡から出土した状況を重ね合わせると、それぞれの時代のいろいろなできごとや背景を物語っているようです。今回の企画展が、本県の歴史や文化を考える上でひとつのきっかけとなれば幸いです。

2009（平成 21）年 9 月 29 日

沖縄県立埋蔵文化財センター

所 長　　玉 栄　直

# 1　貝塚時代からグスク時代

## ①先史文化の共通性と違い

日本の縄文時代から平安時代に並行する時代を、沖縄諸島では「貝塚時代（文化）」とも称します。これは沖縄と日本の文化の違いに主眼をおいた考えです。例えば、「沖縄では縄文時代にあたる時期に縄文文化に特徴的である土偶がない」などがあげられます。

逆に共通性を重視して、日本の縄文時代にあたる時期の沖縄諸島も「縄文時代」でもよい、「縄文文化」の地域色が強いものとする考えもあります。そのひとつが縄文土器の特徴である「土器の口縁部を山形（波状）にする」という点があげられます。

日本では弥生時代になると稲作が広まり、古墳時代には古墳が造られます。沖縄諸島では狩猟採集の生活がつづき、しだいに異なる文化となっていきますが、弥生時代には九州へ運ぶためのイモガイの集積、九州からもたらされた弥生土器がみつかっていて、交流のあったことがうかがえます。

先島諸島の先史文化は縄文文化や沖縄諸島との関わりは希薄で、シャコガイ製の斧や石蒸し調理（ストーンボイリング）など南方の影響を受けたとされます。

**貝輪（平敷屋トウバル遺跡ほか）**

**イモガイの集積（具志原貝塚）**

**箱式石棺墓（渡具知木綿原遺跡）**

写真：読谷村教育委員会提供

下田原式土器（下田原貝塚）：左
と伊波式土器（北原貝塚）：右

## ２つの土器

沖縄諸島の伊波式土器と八重山諸島の下田原式土器です。同じ煮炊き用の土器ですが、伊波式は縄文土器と同じ深いうつわ、下田原式は台湾などと同じ浅いうつわです。

## 爪形文土器

沖縄諸島でもっとも古い土器のひとつで約６千年前のもの。日本の爪形文はさらに古く、沖縄諸島の爪形文は別系統（他人のそら似）とされます。

今回の資料は国分直一・三島格両氏がヤブチ洞穴遺跡で採集したもので、平成 19 年度から当センターで保管することになりました。

ヤブチ洞穴遺跡

爪形文土器（ヤブチ洞穴遺跡）

## 貝の文化

先史時代には貝を素材にしてさまざまな道具をつくりました。沖縄諸島と先島諸島に共通する製品もありますが、先島諸島でみつかるシャコガイ製の斧は南方の影響を受けたものとされます。

シャコガイ製の斧（長間底遺跡）

スイジガイ製利器（左：長間底遺跡、右：具志原貝塚）

### ②グスク時代の文物とヒト

先史時代、沖縄諸島と先島諸島は別々の文化（文化圏）でしたが、グスク（スク）時代になるとひとつの文化圏にまとまります。それを表す特徴的な遺物として九州産の滑石でつくった石鍋や徳之島でつくられたカムィヤキ（亀焼）があります。

日本との関わりでは、グスク時代前半の土葬の墓は日本の影響を受けたとされ、日本の中世人と似た特徴をもつ人骨もあります。また、首里城跡からは日本製と思われる武具や『おもろさうし』で「日本に買いに行った」と歌われる玉がみつかっています。

金属製品（首里城跡）

玉（稲福遺跡）

### 武具と玉

武具や調度（ちょうど）金具には日本製のもの、日本の影響を受けて沖縄でつくられたものがあります。祭祀に用いられたと思われる玉は各地からみつかっており、首里城京の内跡からみつかった玉は重要文化財に指定されています。

勾玉（カンドウ原遺跡）

勾玉と鳩目銭（斎場御嶽）

写真：南城市教育委員会提供

## 【コラム1】

## 「大和旅上て何買いぎや上てが」―久米島おもろの神女たち―

『おもろさうし』には久米島の神女として尚真王の八重山遠征で功をあげた君南風のほか、多くの神女があらわれます。この久米島で、ヤッチのガマ発掘調査の際に**シナグラヤー**の墓の移転が行われました。このシナグラヤーは、『おもろさうし』巻二十一にあらわれる字西銘の神女**しのくりや**とされ、次のようにうたわれています（二一―一四九七）。

一　しのくりやは　世馴れ神　やれば　やれ　このゑ
又　しのくりやが　大和旅　上て　やれ　このゑ
又　神にしやが　山城旅　上て　やれ　このゑ
又　大和旅　上て　何　買いぎや　上てが　やれ　このゑ
又　山城旅　上て　何　買いぎや　上てが　やれ　このゑ
又　青しや　京玉　買いが　上て　やれ　このゑ
又　ふくしや　京つしや　買いぎや　上て　やれ　このゑ

このおもろは「しのくりやが玉を買いに大和へ行った」とうたっていますが、実際に買いに行ったのではなく、「宗教的権威の象徴である〈玉〉の由来にまつわる幻想をうたったもの」とされます。同じ久米島おもろで鉄をもたらしたとうたわれる**こいしの（こゑしの）**（十一―七八三）は、航海にかかわる神女としていくつもおもろがうたわれ、例えば次のようなおもろがあります（一四四四）。

一　久米のこいしのに　漕がせ
又　百浦こいしのに　漕がせ
又　朝凪れが　し居れば　漕がせ
又　夕凪れが　し居れば　漕がせ（以下、略）

と「幻想的な神女の航海（船出）をうたった」おもろとされます。こいしのとならんで**宣の君（精の君）**にも航海にかかわるおもろが多くあり「聞ゑ宣の君が　さいの端の　舞やいど　見物」（一四三六）とあります。航海関係のおもろをおさめた巻十三にはこいしのや宣の君のおもろが多くうたわれ、この二神女の他に、**若清ら**が「久米の若清らが　何　このでおわちへか　追手　乞うて　照るきしきや　使い」（七四八）、**君南風**が「君南風は嵩べて　たすこ山　上て　撫で松は　げらへて　羽撃ちがま　孵ちへ　飛ぶ鳥と　競いして　走りやせ」（九〇一）などとうたわれています。

しのくりやのおもろでうたわれた玉は神聖なものとされ、南城市の斎場御嶽では金の勾玉がみつかっています。久米島おもろでは先ほどのこいしののおもろに玉（手持ち）が神聖なものとして「珈玻羅命　手持ち命　みおやせ島でん　国でん　みおやせ」（一四九八）、**国襲い**のおもろには「聞ゑ国襲いが　国手持ち　げらゑて　果報せぢ　前寄せて　ちよわれ」（一四二九）とあります。

久米島の具志川グスクは『おもろさうし』で「唐の船」、「大和船　せに金　持ち寄せる　ぐすく」（十一―五八二）とうたわれ、同じ久米島には一晩で南蛮を行き来したという女性の伝承もあります。久米島は沖縄本島から中国への航路にあたり「按司添いぎや　親御船　島見らば　久米あら　明日は那覇泊　親御船　宣の君しよ　知りゆわめ」（一三―九〇〇）とその航海を思わせるようなおもろがあります。

久米島の先史時代遺跡からは九州の弥生土器や中国の貨幣がみつかっています。グスク時代にははての浜などの海中やグスクから陶磁器がみつかり、近世には展示しているほかにもヤッチのガマでは多くの肥前系陶磁器がみつかっています。このように久米島は琉球列島と他地域とのつながりを考える上で重要な島であるといえるでしょう。

## 2　陶磁器からみた日本

### ○グスク時代

グスク時代の沖縄は、中国との朝貢関係を基軸に、東及び東南アジア各地と活発な貿易活動を展開していました。当時の様子は遺跡から出土する多国籍の陶磁器からうかがえますが、その中には少量ながら日本産の陶器も含まれています（右写真）。

首里城の陶磁器 1（備前産、瀬戸産など）

これらは首里城やその関連遺跡（円覚寺跡・天界寺跡など）に集中するため、茶道具などのような特殊な用途を持っていたと考えられます。

### ○近世

空前の繁栄を誇った琉球王国も 16 世紀後半頃には貿易活動に陰りが見え、外国産陶磁器の出土量も減少していきます。そして慶長 11（1609）年、沖縄は薩摩藩の侵攻を受け、近世日本の幕藩体制下に組み込まれます。これ以降、沖縄には中国産陶磁器に加えて、日本産の陶磁器が一定量流入するようになります。以下、古墓・首里城・集落の順番に出土陶磁器の概要を説明します。

### ①古墓の陶磁器

古墓の陶磁器は肥前産が大半を占め、年代は 17 世紀～ 18 世紀頃のものが主体です。器種は碗や皿などの日用食器類のほかに、徳利（とっくり）や小杯といった酒に関係する製品が多数みられます。また、煎茶用の急須が酒器として副葬されている例もあります。

古墓の陶磁器 1( 肥前産）

古墓の陶磁器 2 ( 肥前産、薩摩産）

## ②首里城の陶磁器

ここでは、首里城とその関連遺跡から出土する陶磁器をまとめて紹介します。産地別にみると肥前や薩摩などの九州系陶磁器と、京・信楽（しがらき）などの関西系陶器がありますが、近世全体を通じて最も多く出土するものは肥前産の製品です。首里城からは日用の食器類のほかに、植木鉢や香炉といった特殊な器種が確認されています。薩摩産の陶磁器は 17 世紀頃から登場しますが、本格的に出土するのは 18 世紀後半以降で、日用の食器や煎茶用の急須などがみられます。京・信楽に代表される関西系陶器はほとんどが 18 世紀以降のもので、茶道具と考えられる製品が多数を占めます。

首里城の陶磁器 2（肥前産、関西系）

首里城および周辺遺跡の陶磁器（肥前産、薩摩産、関西系など）

### ③集落の陶磁器

集落の陶磁器は肥前産と薩摩産が多く、首里城でみられた関西系陶器はほとんど出土しません。肥前は日用食器が 17 世紀頃から登場しますが、18 世紀以降になると減少していきます。薩摩は首里城と同じく 18 世紀後半以降の日用食器が確認されますが、量的にはそれほど多くありません。

集落の陶磁器（肥前産、薩摩産）

喜友名貝塚一括出土陶磁器

# 3　沖縄からみた日本

## ①首里城にみえる日本とのかかわり

これまでに行われた首里城跡の発掘調査で、日本と沖縄の関わりについて次のようなことがわかってきました。

西のアザナで行われた発掘調査では、武具や貨幣などをつくったと思われれる場所がみつかりました。それに関わる遺物として、ふいごの羽口やるつぼ、枝銭や鋳棹などがみつかっています。琉球王国では世高通宝など独自の貨幣をつくっていましたが、薩摩侵入後は薩摩の統制のもとで貨幣をつくることになりました。

また、円覚寺跡でみつかった金属製品には、日本でつくられたもののほか、その影響をうけて沖縄でつくられたものがみつかっています。

首里城の南殿は書院造に近い外観で、薩摩の役人を歓待するための建物とされます。南殿跡の発掘調査を行った結果、ここでは建物の立て替えが6回あり、15世紀には建物のあったことが分かりました。現在みられる南殿は正殿に対して約80度の角度で建っていますが、この形になったのは6回目（1620年代）の立て替えで、それ以前は直角（90度）で建っていたことが分かりました。

## ②日本出土の沖縄産陶器

グスク時代以来、沖縄には日本から多くの陶磁器がもたらされましたが、沖縄産の陶器が日本へ輸出された例もあります。代表的なものは「鬼の手」とも呼ばれる荒焼（無釉陶器）の徳利で、泡盛の容器として江戸（東京都）・金沢（石川県）・京都・堺（大阪府）・長崎などで出土しています。薩摩では上記の徳利に加えて植木鉢や擂鉢、上焼（施釉陶器）の急須や碗が確認されるなど、陶磁器からも沖縄との関係の深さがうかがえます。また近代になると、泡盛貯蔵用の大型壺が県外へ多数輸出されるようになり、遠くは小笠原諸島まで運ばれています。これらは泡盛が飲まれた後も廃棄されることなく、日本茶の保存容器などの再利用を経て、現在まで大切に残されたと考えられます。

日本出土の沖縄産陶磁器（参考資料）

## 【コラム2】
## スンカンマカイについて

スンカンマカイ

印判染付とコピー

近代の日本では、陶磁器産業にも西洋の技術が導入され、安価で質の一定した規格品を多数生産できるようになりました。中でも和紙や銅版を用いた印判染付は砥部（とべ）（愛媛県）・瀬戸（愛知県）・美濃（岐阜県）・有田（佐賀県）などで生産され、国内はもとより海外へも輸出されました。沖縄では方言でスンカンマカイと呼ばれる腰の張った端反碗（はぞりわん）（写真上）が大量にみられますが、これらは当時の沖縄の陶器生産、特に上焼に大打撃を与えたようです。ちなみに、首里城からは印判染付をコピーした沖縄産陶器（写真下）が出土していますが、この資料は当時の沖縄の陶工達が苦闘した証ともいえるでしょう。

## 【コラム3】
## うつわに刻まれた「戦争」

近代の日本産陶磁器には、「戦争の世紀」とも称される20世紀前半代の世相を反映した資料もあります。写真上にみられるものは生産者や工場を識別する番号で、自由経済を謳歌していた窯業が再び国家の統制を受けるようになったことを示しています。また写真下の小杯には軍旗・日章旗・海軍のシンボルマークである碇（いかり）のような戦時色の濃い図柄が描かれるなど、陶磁器の文様からも当時の緊張した空気が伝わってきます。

生産者識別番号

戦時色の濃い文様

## 【コラム４】県内で確認された陶磁器の埋納

遺跡の発掘調査では、意図的に埋められた陶磁器が発見されることがあります。埋納と呼ばれるこのような状況は県内でも数例確認されていますが、時代によって埋納の意味や目的が異なると考えられます。つまり、グスク時代から近世の埋納は地鎮などの祭祀行為と捉えられますが、近代の埋納は沖縄戦に伴う個人財産の一時避難であったと思われます。これらはコラム２で述べたスンカンマカイに代表される日本産磁器で構成されており、一部に近世の中国産磁器が混ざる例もありますが、沖縄産の陶器はほとんどみられません。このことからも、当時の沖縄における陶磁器の嗜好が読み取れます。

**埋納された陶磁器（喜友名貝塚）**

＜参考文献＞ ※報告書除く


新垣力 2004「沖縄・首里城出土の九州陶磁」『第 14 回九州近世陶磁学会資料集 受容層の違いによる九州陶磁の様相』九州近世陶磁学会

上江洲均 2003「シナグラヤーの墓」『久米島 西銘誌』西銘誌編集委員会

大手前大学史学研究所オープンリサーチセンター 2007『大手前大学史学研究所オープンリサーチセンター研究報告第3号 近世丹波焼の研究』

大橋康二 2003「沖縄出土の日本陶磁」『東洋陶磁』第 32 号 東洋陶磁学会

小田静夫 2003「海を渡った壺屋焼陶器」『壺屋焼物博物館紀要』第4号 那覇市立壺屋焼物博物館

おもろ研究会 1987『おもろさうし精華抄』ひるぎ社

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（106） 堂平窯跡』

嘉手苅千鶴子 1996「仲里関係オモロ」『仲里村史』2（資料編1） 仲里村

関西陶磁史研究会 2001『近世信楽焼をめぐって 研究集会資料集』

岸本竹美 2003「グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察」『沖縄埋文研究』1 沖縄県立埋蔵文化財センター

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会 10 周年記念』

京都国立博物館 2003『金色のかざりー金属工芸にみる日本美ー』

佐賀県立九州陶磁文化館 1990『開館 10 周年記念 「海を渡った肥前のやきもの」展』

財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター 2007『平成 19 年度財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター企画展 窯跡出土の“近代陶磁”ー瀬戸・美濃の近代1ー』

下地安広 2002「沖縄の遺跡から出土する統制経済下の磁器」『南島考古』第 21 号 沖縄考古学会

城間 肇 2001「首里城跡出土の初期鍋島ー首里城管理用道路地区出土の資料からー」『琉球大学考古学研究集録』3 琉球大学法文学部考古学研究室

城間 肇 2003「沖縄出土の肥前陶磁の様相ー実年代検討の基礎的研究・上」『琉球大学考古学研究集録』4 琉球大学法文学部考古学研究室

城間 肇 2004「沖縄出土の肥前陶磁の様相ー実年代検討の基礎的研究・下」『琉球大学考古学研究集録』5 琉球大学法文学部考古学研究室

瀬戸哲也 2003「グスク時代の土壙墓・石組墓ー発掘資料からー」『沖縄埋文研究』1 沖縄県立埋蔵文化財センター

瀬戸哲也 2005「首里城跡木曳門地区出土の土師皿と思われる土器皿」『紀要沖縄埋文研究』3 沖縄県立埋蔵文化財センター

瀬戸哲也 2008「南の境界・琉球の瓦質土器」『第 27 回中世土器研究会 瓦質土器の出現と定着ー瓦質土器を考える（後編）ー』日本中世土器研究会

土肥直美 2003「人骨からみた沖縄の歴史」『沖縄県史』各論編2（考古） 沖縄県教育委員会

仲原善忠 1957『おもろ新釈』琉球文教図書株式会社

仲原 譲 1996「久米島関連オモロにあらわれる人物」『沖縄文化』83 沖縄文化協会

那覇市立壺屋焼物博物館 2008『那覇市立壺屋焼物博物館開館 10 周年記念特別展「壺屋焼 近代百年のあゆみ」』

外間守善・西郷信綱 1972『おもろさうし』（日本思想体系 18） 岩波書店

外間守善・ほか 1982「久米島おもろの解釈」『沖縄久米島』弘文堂

宮城弘樹 2002「いわゆるスンカンマカイについて」『壺屋焼物博物館紀要』第3号 那覇市立壺屋焼物博物館

渡辺芳郎 2004「近世陶磁器から見た鹿児島と沖縄」『第5回沖縄考古学会・鹿児島県考古学会合同学会研究発表会資料集 20 年の成果と今後の課題』沖縄考古学会・鹿児島県考古学会

## 4　特別寄稿

# 【特別寄稿 1】考古学とアイデンティティーについて

新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査室 助教）

考古学とアイデンティティーの関わりについては、ある一定期間、地理的な一定領域をもつ物質文化に対して、それを生産・消費した集団のアイデンティティーを投影しようとする試みと、研究者自身のアイデンティティーが解釈に投影されている場合とがあるだろう。前者は、物質文化の分布や動きなどの背後に何らかの構造を読み取るという作業であるが、後者は、解釈の段階において研究者のアイデンティティーというフィルターに通されることである。

先史時代の考古学研究は、文献など他に補える資料がないため、主として前者に依るところが大きい。しかし、後者のフィルターを完全に排除することは実は難しい。

「南島貝交易」は、日本本土地域を中心とした消費者集団のニーズに南西諸島地域の供給者集団が対応した長距離交易である。供給者側は、貝の生態環境に左右されている可能性が高く、イモガイ・ゴホウラ交易においては最も採取量の多い沖縄諸島地域に、ヤコウガイ交易では奄美諸島地域に、その主要供給地が変遷していると考えられる。このように交易のプロセスが詳細に分析されてゆくにつれて、外来物資の得られる供給地域は、南西諸島内でも一定地域に限定されるものではないようである。交易は、消費者・供給者がおり、どちらかが交易集団を擁し、それを管理するといったシステムが最低限必要であろう。また、情報の維持・管理、環境整備なども重要になると考えられる。弥生時代から中世までの長期的なスパンでは、当然、消費者も変わり、交易体制なども変化するだろう。一元的なプロセスでは理解が難しく、より複雑なプロセスを経ている可能性が高い。

高梨修氏の論をあげると、ヤコウガイ交易は「律令社会上層部の管理交易」であり、それに対して奄美諸島は、「首長層に束ねられた複合社会」であった。また、一定の「階層化社会」へ社会的な変化を遂げているとして、同時代の鉄器の大量出土や開元通宝の出土事実もそれを支持するものであるとする。また、この時期、本土における古代国家の南島政策に関わる地域であるとの文献史学側の成果を応用し、中世までに変動を繰り返す国家の境界領域である奄美諸島地域の特質と、豊富な燃料を保持し、集約的土地利用できる自然環境の側面から、徳之島にカムィヤキ古窯群が設置されたとする説などを提示している。また、琉球王国についても機能的側面から見れば、日本本土の「中世国家の境界領域に誕生した巨大交易機構」と捉えられるとし、「琉球王国」の性格について斬新な切り口を提示していることは重要であろう。また、近年、安里進氏によって久米島で確認された「ヤコウガイ大量出土遺跡」の「大原ヤコウガイ加工場遺跡（仮称）」の存在自体が不明であるにも関わらず、その遺跡を用いて、「琉球王国論に収斂させている」論法として断じ、資料操作法について痛烈な批判を加えている。

安里進氏は、沖縄諸島における歴史時代への画期の重視と、国家形成をひとつの到達点と捉え、沖縄諸島地域の貝交易活動を主軸とする社会と、南西諸島内における社会的優位性を描き出す。これによって、「王権」の成立を沖縄諸島の社会発展段階として、連続的に理解

しようと試みている。

しかし、古代並行期の奄美諸島が階層化された社会であり、南西諸島内でも外地との交渉において最も隆盛しており、外来物資を得ていたにも関わらず、対外的な文献に残る「王権」成立へは移行しなかった。する必要性がなかったという側面からも考える必要もあるだろう。古代奄美社会の構造の把握は、今後の研究にかかっているが「琉球王国論収斂説」の批判者は、奄美諸島に対外的な記録を残す「王権」が生じなかった理由に答える必要があるだろう。

「ヤコウガイ大量出土遺跡」の分布を見ると（図１）、古代並行期の奄美諸島地域では、「ヤコウガイ大量出土遺跡」は、笠利町の東海岸側に集中し、ほかに名瀬市にも所在する。沖縄諸島地域では久米島に存在している。「貝匙」の加工製作遺跡は、島嶼的にも島内でも、上記のように偏在していることが分かるが、同時期の集落の「集落間格差」の分析や、遺跡自体が交易拠点であるかの分析、また、同時期の遺跡間において、鉄器や開元通宝が遺跡間の差もなく出土する場合は、階層化社会想定の補助材料としての性格も吟味する必要があるのではないかと思う。また、高梨氏も安里氏も、ほぼ同時期に存在する奄美諸島と久米島におけるヤコウガイ大量出土遺跡を認めていながら、遺跡相互の類似点や差異を、それぞれの論拠となる社会的背景のなかで相対化していない。お互いにこの地理的に離れた地域の遺跡の位置づけがあいまいのままになっている。上記のような、近年の奄美・沖縄の研究者の初期国家形成期の論考は、研究者同士の中世琉球王国論と日本古代・中世国家論のイデオロギーの対立にも読み取られかねない。研究者にはそのような意図はないはずであるが、現在の社会情勢でもわかるように、国境や領域の問題は、感情をいたく刺激するのもまた事実である。

ここでは考古学における文献史学の利用を批判しているのでもなく、分析の切り口を批判しているのでもない。無文字時代にも適用できる理論や資料操作法を、考古学資料という同じ土俵で研究成果をぶつけ合うことも、今一度提案したいのである。それには最も基本となるのは、情報の一般化である。考古資料の公開が行われずに理論が先立っていく方向性は危険を孕む。

弥生時代～古墳時代並行期を見ても、奄美諸島が「南島貝交易」において仲介者集団として重要な役割をしていたと考えられる文脈は、考古学資料の検討からも存在する。古代～中世並行期のヤコウガイ交易・カムィヤキ交易においても日

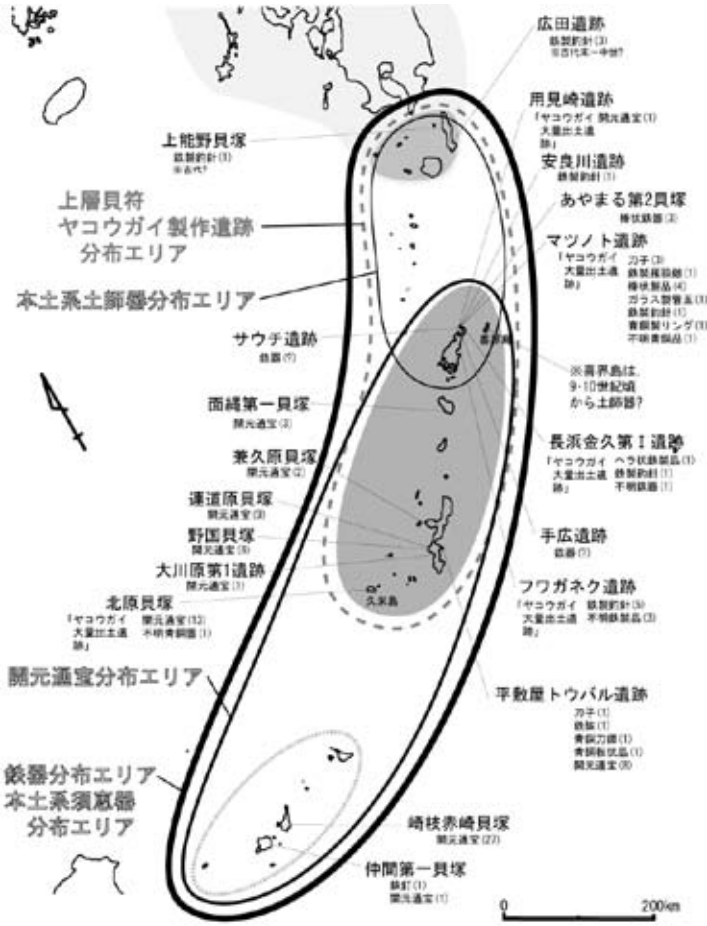


図1　古代並行期（7c-）
※実線枠は外来遺物分布

本古代・中世国家の境界領域としての役割が高梨氏によって想定されている。高梨氏のいうところの変動する「境界」や「辺境」とする奄美諸島が、相対的に個性の強い異なる文化圏の交差地点であるとするならば、奄美諸島の特性は、そこをどのように認識できるのか、相対的に境界地域とみられる地域の文化的自律性をどう捉えるかが重要な視点になるだろう。そのためには、考古学的に文化要素の分析を行い、あらためて質的に捉えなおす必要があると考える。文献史料のような為政者側の政治的記録からみた検討は、古代の奄美、中世の沖縄というように、どうしても特定時期の、一方向の領域や社会の様相が色濃く反映してしまう。島嶼地域においても、人間の活動は途切れることなく行われているわけであるから、安里氏のように、一時期の歴史叙述だけでなく、その長期的なプロセスから把握する視点も必要であろう。

今回、南島貝交易という観点から、考古学とアイデンティティーの関わりについて概観したが、高梨氏のように国家領域という視座から奄美の新しい交易像・社会像が描ける可能性も指摘されている。奄美諸島地域の考古学資料から抽出される現象は、弥生時代並行期の土器様式の問題にせよ、古代～中世の交易という問題にせよ、従来にない新たな歴史解釈・モデルの構築が可能な地域であると思う。近年の研究もそれを支持しているのである。

＜参考文献（刊行年順）＞


永山修一「キガイガシマ・イオウガシマ考」『日本律令制論集』（下）笹山晴生先生還暦記念会、1993 年

木下尚子『南島貝文化の研究』法政大学出版、1996 年

池畑耕一「考古資料から見た古代の奄美諸島と南九州」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会、1998 年

名瀬市教育委員会（編）『サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流』、1999 年

山里純一『古代日本と南島の交流』吉川弘文館、1999 年

古代学協会（編）『古代文化』第 52 巻第3号、2000 年

小川英文（編）『交流の考古学』朝倉書店、2000 年

名瀬市教育委員会（編）『徳之島カムィヤキ窯跡群の世界』、2001 年

高梨修「知られざる奄美諸島史のダイナミズム」『沖縄文化研究』27 法政大学沖縄文化研究所、2001 年

安里進「南風原に人が住み始めるまで」『むかし南風原は』南風原町役場、2002 年

沖縄考古学会（編）『沖縄諸島の弥生時代並行期』、2002 年

木下尚子（編）「先史琉球の生業と交易」、2002 年（改訂版は 2003 年）

奄美群島交流推進事業文化交流部会実行委員会（編）『カムイヤキ古窯群シンポジウム』、2002 年

高梨修「角田文衛『上代の種子島－日本文化の南限について－の再検討－琉球弧における古代～中世の国家境界認識－」法政考古学第 30 集、2003 年

新田栄治「『島嶼王権』の形成と海域世界－比較考古学と比較史の視点から－」『奄美ニューズレター』№4 鹿児島大学、2004 年

高宮廣衛･知念勇（編）『考古資料大観12貝塚後期文化』小学館、2004 年



○「奄美諸島地域における考古学覚書－近年の弥生時代～中世初頭の研究を中心として－」『奄美ニューズレター』18（鹿児島大学　2005 年）の一部を転載・改変（市町村名は 2005 年当時）

# 【特別寄稿 2】琉球王国と鋳銭生産の画期

上原　靜（沖縄国際大学 総合文化学部教授）

枝銭と鋳棹が首里城内から出土したことにより、15 ～ 16 世紀の琉球国において、まぎれもなく悪銭または鳩目銭と揶揄された輪銭が、生産され、そして正真の公鋳銭の一つであることがわかった。その鋳銭技法が中世日本に類似し、また、日本全国的にみられる無文銭の存在からも流通圏にリンクしていることが推測できる。ただ、この時代における琉球国の鋳銭はいわゆる官公用の金属製品を含めた一括管理の体制で行われていて、中世日本における京都、鎌倉、博多、堺などの中核都市において、街屋敷内で鋳銭のみが出吹き生産（註 36）される形態とは様相を大きく異にし、一線を画する。すなわち琉球が 15 世紀後半から 17 世紀初頭における外国製銭貨を獲得し、さらに封建制の確立から独自で銭貨を鋳造する一国家として、貨幣統制権のもとに貿易政策を強いていたことを明示している。今回の資料から、無文銭（輪銭）の一つが王国産であることが実証されたが、銭文のある銭貨に関してはいまだ確定資料をみていない。しかし、これまで江戸後期の古銭学から、琉球銭の間にみられる書風の共通性が指摘（註 37）されていて、近年の金属学的分析から首里城内出土の世高通宝（1461）が青銅合金系の成分であることと、銅粒子を付着した羽口や銅滓から鋳銭の可能性が指摘された（註 38）。そのなかにおいて、今回紹介した西のアザナ地域における梵鐘や金具など鋳型の存在と鋳造工房存在そのものが、有力な傍証になろう。また、銭貨鋳造研究では世高通宝（1461）、大世通宝（1454）、金圓世宝（1470）ともに永楽通宝を土台（註 39）にした、嵌め込み式製作法（註 40）という同一鋳造技法である点からも支持され、城内において鋳銭された蓋然性は高いといえる。したがって、この官営工房を経営している独立国家として、銭文のある銭を専ら琉球国外向けの取引や国の自立を意識して生産したのに対し、国内向けとして無文銭、輪銭を鋳造していたものと考えられる。

ただし、この王権による組織的な鋳銭は長くは続かなかったようである。つまり、首里城内における鋳銭操業が 17 世紀前半段階には止めていることが発掘調査から窺える。ただし、当該時期における金属の社会的需要は歴史文献から国内においては益々拡大していることが認識でき、その金属生産の中断はありえず、当然のことながら城内から城外への移設が推測される。時代は下るが首里古地図（18 世紀初頭）にみる首里城周辺や那覇の市街に鍛冶所がみられることからも解せられる。ただし、鋳銭の部門に関しては、移設先が不明である。文献記録では､1624 年『柳姓家譜』に鳩目銭申請の使者として山城康延が薩摩に赴くことや（註 41）､『球陽』では鳩目銭は寛永 3 年（1626）、薩摩で鋳造され琉球で流通したが、後年銭が減少したため、当間重陳が薩摩に鋳造を願いでたことが認められる。しかし、当間の場合は叶えられず、日本では使用禁止の加治木銭を与えられた。当間はこれを持ち帰り、1657 年に那覇の奥武山と越来間切池原で改鋳したとある。これが琉球における鳩目銭の鋳銭の開始で、後の当間銭と称される由来とされる。

つまり文献記録から、当間銭を鋳銭する 1657 年以前は薩摩藩で鋳銭がなされていたこととになる。これは首里城西のアザナ工房が廃棄された 17 世紀前半段階に相当する。琉球国

における15世紀中からの鋳銭開始の文脈からみると、琉球国の銭貨鋳造権（註42）が、薩摩藩に渡っていたことを意味しよう。この琉球における鋳造権の喪失の契機が1609年の薩摩島津氏による琉球侵攻である点は、琉球史の経緯からしても推測に難くない。1611年薩摩が掟十五条を提示し具体的な支配が認められるが、当時期からではなかろうか。この侵攻後間もない段階から当間銭の生産までの46余年間は、琉球における鋳銭の中断期ともいえよう。このように生産地の変遷、薩摩の統制のもとに19世紀まで鋳銭を続けた長大な時間と、後述の銭使いに関する強要などの諸事情が、様々形態の無文銭を生み、流通（流入）させる背景をなしたものと推測される。

なお、薩摩が琉球に鋳銭を許可した理由は、1636年に幕府による寛永通宝が生産されるにともない私鋳銭禁止令の発令で、薩摩における鋳銭が不可能になったことにある。しかし、薩摩藩は鋳銭場そのものを琉球に移しながらも、銭貨統制権を掌握し続けていることは、琉球通宝（1862）が薩摩で鋳鋳され薩摩で流通していたことや、冊封使一行の琉球滞在中においては、普段の日本銭（寛永通宝）を隠し鳩目銭の使用を強要していることなどからも読み取ることができる。これも薩摩による統制が露顕し、延いて琉球国の進貢貿易の障碍となることをさけるための一つと考えられている（註43）。以上、その琉球国の成立とその後の日本幕藩体制に組み込まれていく一連の経緯が、鋳銭と銭の状況から垣間見ることができた。

【引用文献】


註36. 嶋谷和彦「堺出土の鋳銭型と中世後期の模鋳銭生産」『中世の出土銭』長井久美男編 1994年

註37. 古田修久「中世から近世前期の九州・沖縄の銭貨－古銭学的観点からの分類－」『出土銭貨』第23号 2005年

註38. 大澤正巳「カイジ浜貝塚出土の鉄器及び周辺遺跡出土遺物の金属学的調査」『カイジ浜貝塚』（沖縄県文化財調査報告書第115集） 沖縄県教育委員会 1994年

註39. 永井久美男「中世期の銭貨分類図版（補遺）」『中世の出土銭』1996年

註40. 東野治之「永楽銭に筆蹟を残した日本僧」『貨幣の日本史』1997年

註41. 中山盛茂「鳩目銭」『琉球史辞典』1969年

渡口真清「鳩目銭」『沖縄大百科』下 1983年

嵩元政秀「沖縄県内出土の銭貨について」『南島考古』第1号 1970年

嵩元政秀「遺跡出土の銭貨の取扱いについて」『興南研究紀要』第6号 1978年

嵩元政秀「出土銭貨の分類と特徴」『沖縄歴史地図』宮城栄昌・高宮廣衛編 1983年

註42. 服部英雄「中世の通貨管理」日本史を読み直す 毎日新聞西日本夕刊2006年11月18日

「日本中世国家の貨幣発行権」『東アジアと日本：交流と変容』総括ワークショップ報告書 2007年

註43. 仲吉朝助「鳩目銭の研究」（沖縄教育会『沖縄教育』）第144号 1925年



※「琉球国と鋳銭」『出土銭貨からみた環シナ海と琉球史』（出土銭貨研究会　2008年）より転載

平成 21 年度企画展
「考古資料にみる日本・沖縄」

2009（平成 21）年 9 月 29 日

編集・発行　沖縄県立埋蔵文化財センター
住所　沖縄県中頭郡西原町上原 193-7
電話　098-835-8752
FAX　098-835-8754

## 関連行事

第 35 回文化講座

**「江戸時代の陶磁器からみた薩摩と琉球」**

講師：**渡辺芳郎**（鹿児島大学教授）

日時：2009 年 10 月 3 日（土）午後 2 ～ 4 時

場所：沖縄県立埋蔵文化財センター　研修室

入場無料　先着 140 名　申込み不要

●開所時間　午前 9 時～午後 5 時まで（入所は午後 4 時 30 分まで）

●休所日　毎週月曜日、国民の祝日（こどもの日、文化の日を除く）

年末年始（12 月 28 日～ 1 月 4 日）、慰霊の日（6 月 23 日）

※祝日と月曜日が重なった場合は、翌火曜日も休所

●交通　◇沖縄自動車道西原ＩＣより車で 7 分

◇市外線バスターミナル発　那覇バス 97 番

「琉大附属病院前」下車徒歩 1 分